

RY

国際協力事業団

17952

JICA LIBRARY



1067276L4J

17952

序 文

日本国政府は、タイ王国政府の要請に基づき、同国のアユタヤ歴史資料館建設計画にかかる事前調査を行うことを決定し、国際協力事業団がこの調査を実施した。

当事業団は、昭和 61 年 8 月 17 日より 8 月 27 日まで、外務省無償資金協力課課長補佐吉田雅治氏を団長とする第 1 次事前調査団および昭和 62 年 1 月 21 日より 1 月 30 日まで、外務省無償資金協力課真鍋寛氏を団長とする第 2 次事前調査団を現地に派遣した。

調査団は、タイ国政府関係者と協議を行うとともに、プロジェクトサイト調査及び資料収集等を実施し、帰国後の国内作業を経て、ここに本報告書提出の運びとなった。

本報告書が、今後予定されている基本設計調査実施、その他関係者の参考として活用されれば幸いである。

終りに、本件調査にご協力とご支援をいただいた関係者各位に対し、心より感謝の意を表すものである。

昭和 62 年 4 月

国際協力事業団

理事 中曾根 悟 郎



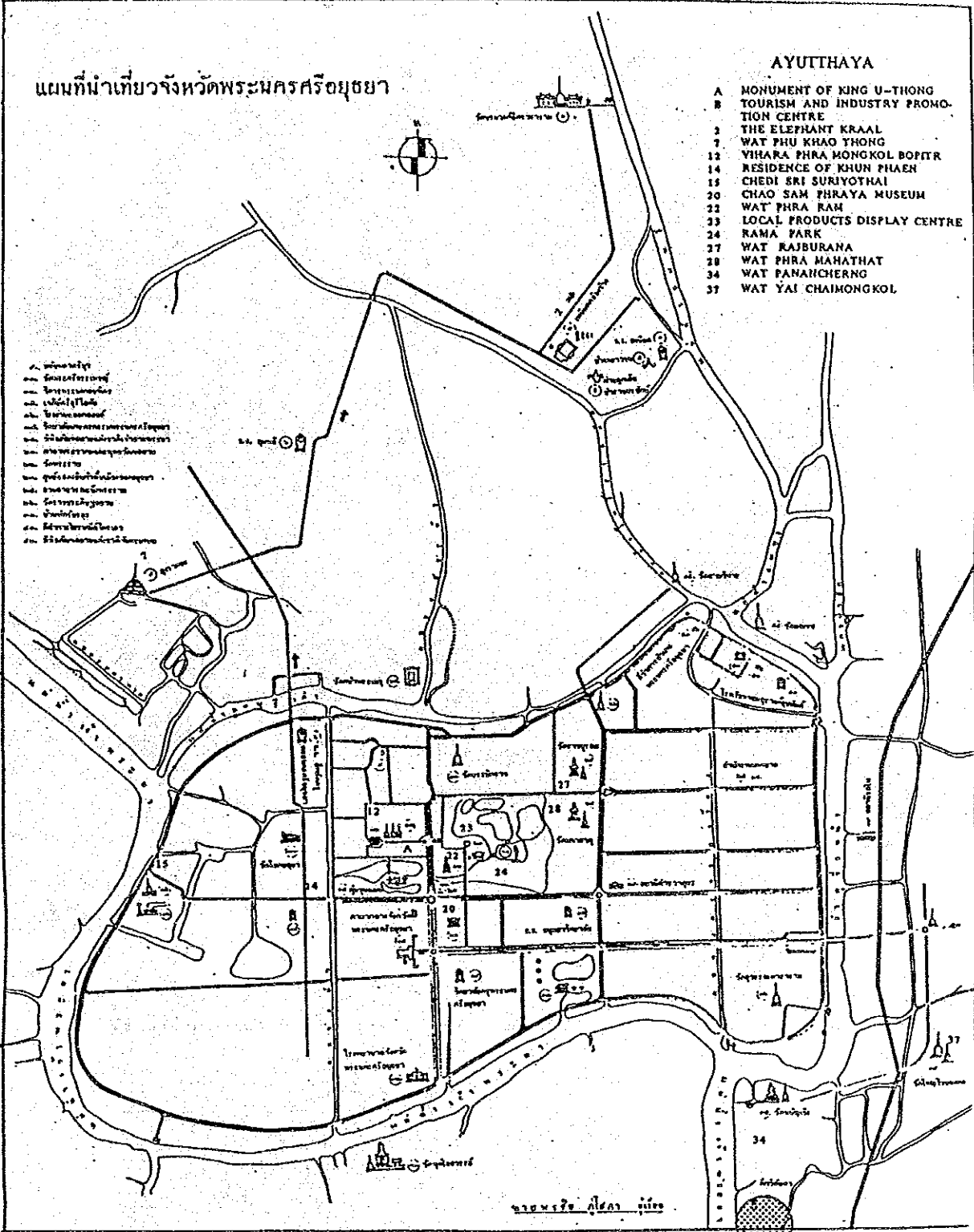
G U L F
O F

Kas Kong
Sala
Kas Samit
Kas
Kas Rong Sai

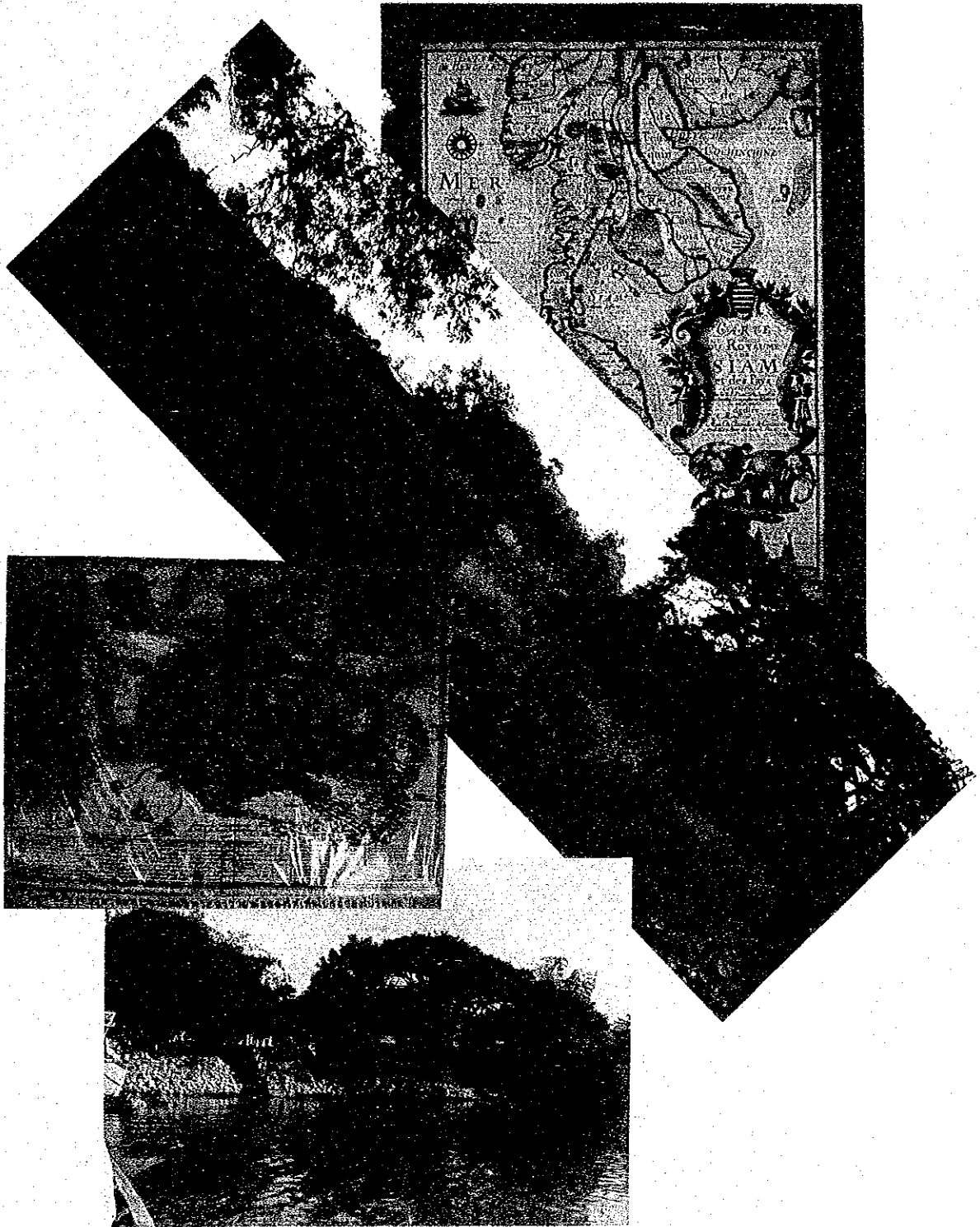
แผนที่น้ำเที่ยวจังหวัดพระนครศรีอยุธยา

AYUTTHAYA

- A MONUMENT OF KING U-THONG
- B TOURISM AND INDUSTRY PROMOTION CENTRE
- 3 THE ELEPHANT KRAAL
- 7 WAT PHU KHAO THONG
- 12 VIHARA PHRA MONGKOL BOPITR
- 14 RESIDENCE OF KHUN PHAEN
- 15 CHEDI SRI SURIJYOTHAJ
- 20 CHAO SAM PHRAYA MUSEUM
- 22 WAT PHRA RAM
- 23 LOCAL PRODUCTS DISPLAY CENTRE
- 24 RAMA PARK
- 27 WAT RAJBURANA
- 28 WAT PHRA MAHATHAT
- 34 WAT PANACHERANG
- 37 WAT YAI CHAIMONGKOL



建設予定地



要 約

アユタヤは、タイ国の首都バンコクの北 70km にあり、チャオブラヤ川沿いの交通に恵まれた位置にある。このアユタヤを中心として栄えたアユタヤ王朝は、1350 年から 1767 年まで、33 代王朝 417 年にわたる王朝であり、前期（1350 年から 1567 年）と後期（1570 年から 1767 年）に分けられる。前期は中央集権国家の確立の時代であり、後期は西欧諸国（ポルトガル、スペイン、オランダ、英国、フランス等）や中国、日本を含むアジア各国との交易を通じて繁栄した時代である。

しかしながら、この繁栄を極めたアユタヤ王朝文化についての文献、資料遺跡等は各地に散在、あるいは未発掘の状態であり、系統的な調査研究が行われていない現状である。上述の様にアユタヤ王朝時代はタイ国の歴史のなかでも東西貿易を中心として最も繁栄した時期である。タイ国がその輝かしい歴史を顕彰し、一般市民および世界からの訪問者に対してわかりやすく展示するための一定の設備を整えることは、アユタヤ史を研究する歴史学者ばかりでなく、タイ国の一般の人々にとって有意義であると言える。かかる背景のもとにタイ王国政府はアユタヤ歴史資料館建設計画を策定し、我が国に対して無償資金協力を要請して来た。本要請を受けて昭和 61 年 8 月 17 日から同年 8 月 27 日まで標記計画にかかる第 1 次事前調査を実施した。調査結果は以下のとおりである。

1. 本プロジェクトの目的は展示を通じて、アユタヤの歴史をタイ人ばかりでなく、外国人に対しても正しく知らせ、理解せしめる機会を与えることである。
2. タイ側はプロジェクトサイトとして旧日本人町跡地を考えているが、同跡地の遺跡を発掘するか、更には所有権等の問題等があり、タイ側でこれらの点を踏まえて、検討の上、サイトの決定を行う。
3. 本資料館が建設された後の必要な予算および人員の確保についてはタイ側が行う。
4. 本資料館建設計画の要請内容、歴史資料館としての理念および基本構想を練り直し、サイトの問題を含め、昭和 61 年 10 月末を目途として日本側へ提案する。

タイ国政府は上記の結果を踏まえ、日本国政府に対して、昭和 61 年 10 月 29 日付で改訂要請書を提出越した。またタイ国は昭和 61 年 12 月 23 日、同国政府閣議においてタイ・日修好百周年記念委員会を正式に承認した。同委員会の中にアユタヤ小委員会（アユタヤ県知事が委員長）が設置され、その第 1 回会合が昭和 62 年 1 月 11 日に開催され、本計画推進のための協議が行われた。

日本側はこれら一連のタイ側の対応を受けて、昭和 62 年 1 月 21 日から同年 1 月 30 日まで第 2 次事前調査を実施した。調査結果は以下のとおりである。

1. タイ国政府はアユタヤ小委員会（25 名よりなる）の中にタスクフォース（11 名よりなる）を発足させ、このタスクフォースが日本側調査団と協力して本計画の実施を推進してゆく。

2. 本プロジェクトサイトは旧日本人町跡地のうち北半分を利用することとする。
3. 歴史資料館の運営，維持，管理はアユタヤ県庁があたることとし，必要な予算および人員の確保を併せて行う。
4. 歴史資料館は，アユタヤの歴史にかかる種々の展示機能と情報センター機能の2つを持つものとする。なお，将来の方向として同資料館が他の研究機関，大学並びに博物館と協力して研究活動を行う。
5. 歴史資料館にかかる展示テーマは次の通りとする。
 - 1) 交易都市としてのアユタヤ
 - 2) 中央集権国家としてのアユタヤ
 - 3) アユタヤの生活文化
6. 旧日本人町周辺整備計画と歴史資料館建設計画が調和のとれたものにするため，日本側の基本設計調査団が旧日本人町周辺整備計画のマスタープランを作成する。

第1次，第2次の事前調査の結果，本件計画の背景，内容，実施体制，プロジェクトサイトが明らかとなり，歴史資料館そのものの目的，機能を確認し，展示テーマおよび基本構想等についてもタイ側と共通の認識を持つに至った。

本計画が実施されれば，タイ国の人々に対する社会教育の場を提供できるばかりでなくアユタヤ史の研究者に対しても研究の場を提供することにもなる。我が国の無償資金協力として妥当な案件として思料されるところ，早期に基本設計調査の実施が望まれる。

目 次

要 約

第1章 緒 論	1
1-1 調査団派遣の目的	1
第2章 要請の背景	1
2-1 歴史的背景	1
2-2 周辺博物館及び関連施設の現状	1
第3章 要請の内容	3
3-1 経 緯	3
3-2 計画の概要	3
第4章 調査結果	5
4-1 資料館の目的と機能	5
(1) 目的と機能の概念図	5
4-2 展示の基本構想	6
(1) 展示テーマ(主要)の概念図	6
(2) 展示ゾーニングプラン	7
(3) 展示イメージスケッチ	8
4-3 展示資料調査の概要	9
4-4 敷地調査の概要	10
4-5 計画用地の調査	10
(1) 資料館建設位置	10
(2) 地質ボーリング	11
(2)-1 ボーリングの位置及び発注	11
(2)-2 ボーリングの結果	11
(2)-3 地 質 解 析	11
(3) 用 地 測 量	11
(3)-1 測量調査及び発注	11
(3)-2 測 量 図	12
4-6 マスタープラン	12
(1) 敷地整備要素	12
(2) インフラストラクチャー	12
(3) マスタープラン概要図	12
4-7 資料館設計の基本構想	13
4-8 今後のプロジェクト推進にあたって	13

< 資 料 編 >

資料- 1	協 議 議 事 録	15
資料- 2	調 査 団 の 構 成	29
資料- 3	調 査 日 程	30
資料- 4	タイ王国関係者リスト及び日本国学者グループリスト	31
資料- 5	アユタヤ歴史資料館基準構想「事前調査（第2次）の 報告と所見	34
資料- 6	イメージマップ№1～№4	41
資料- 7	敷地の現状写真	49
資料- 8	敷地の概略記録図	51
資料- 9	建設エリアの限定及びボーリング位置の指定図	53
資料- 10	ボーリング調査報告書（抜粋）	54
資料- 11	用地測量図（スケール＝500分の1）	63
資料- 12	整備要素の記録写真	65
資料- 13	マスタープラン断要図（スケール＝500分の1）	67
資料- 14	施設機能図	69
資料- 15	空間概念図	71
資料- 16	組 織 図	73
資料- 17	工 程 表	74

第1章 緒 論

1-1 調査団派遣の目的

本事前調査団はアユタヤ歴史資料館建設計画に係るタイ王国政府の要請内容を検討し、タイ側タスク・フォース（実行委員会）を中心としたメンバーと協議を重ねた結果、日・タイ双方とも別添資料編資料-1協議議事録通の通り合意に達した。

特に展示物資料調査に関しては本計画の妥当性を検討しながら、その目的と機能を明確にし、かつ展示基本構想（仮）を確定した。今回の具体的展示資料については、本報告第4章で記した通りである。一方、遺跡地質調査に関しても、タイ側タスク・フォースの中の学者グループの参画のもとに現地にて検討を重ねた結果、ボーリングによる地質調査に加えてサイト測量図の作成も行った。

第2章 要請の背景

2-1 歴史的背景

タイ国の首都バンコックの北70kmにあるアユタヤは、1350年シャムの都と定められて、1767年ビルマ軍の侵入によって破壊されるまでの約400年間、33代の王に統治され、西ヨーロッパ、日本など東西貿易の中継基地として繁栄した。しかし、この繁栄を極めたアユタヤ文明の貴重な証となる遺跡等資料は、そのほとんどが各地に散在あるいは未発掘である。これらを収集又は復元したものを展示し、かつまたアユタヤ文明についての理解・学習の機会をあたえるため、タイ国政府は歴史資料館の建設を計画し、その実施についてわが国へ無償資金協力を要請してきた。なお、昭和62年は日タイ修好宣言調印100周年にあたり、記念行事が企画されているところ、この1つの記念行事として本件資料館の建設が、強く期待されているところである。

2-2 周辺博物館、関連施設の現状

本計画の中心地アユタヤ島には、王朝時代のロイヤルパレスを中心とした広大な遺跡公園があり、その周辺に点在する寺院等と共に現在も発掘と修復保存が継続されている。その中心にあるアユタヤ国立歴史博物館（CHAO SAM PHRAYA MUSEUM）は遺跡の発掘品及び寺院関係の映像品等を主体として展示している。これらの展示物の学術的及び観光的価値は遺跡群と共に高レベルのものであるが、やはり一般的に見るべき施設群としてはここより約70km離れた首都バンコックであろう。まず、年間を通じて国内外の多数の訪問者に溢れている現在の王宮周辺における諸施設があり、これら王宮・寺院などの建造物のほかには、多くの公開展示物を有するバ

ンコック国立博物館がある。こちらは国を代表する施設であり、規模も大きく貴重な実物資料に恵まれているが、市民ともっとも結びつきの強い公開展示については、アユタヤ国立博物館と共に、その方法論及び技法などのレベルが多分に“陳列”という初歩的展示方法にとどまっている。市内で、その他多くの人々が訪れるものとして、有名なジム・トンプソンの家の個人的コレクションぐらいであろう。

郊外型の野外博物館として、最近特に評判の高いものに、エンシェント・シティ（The Ancient City）と、以前から外国人の訪問客が多いローズ・ガーデン（Rose Garden）等がある。いずれにおいても内部展示を軸にして、現在社会に十分対応でき得る内容を持った博物館施設は、ほとんど見当たらないのがバンコック及びアユタヤ周辺における現状であるといえよう。

第3章 要請の内容

3-1 経緯

タイ王国政府から日本国政府へ無償資金協力を要請されている本計画に関し、昭和61年8月第1次事前調査を実施した。要請の背景、要請の内容、実施体制等について確認するとともに、その問題点の基本構想、展示の内容、サイトの整備、実施主体者等を把握し、タイ側との協議検討を行い、その結果は次の通りであった。

- (1) 本計画は展示を通して史実に基づいたアユタヤ王朝の歴史についてタイ国の人々及び諸外国の人々に知らしめることを目的とする。
- (2) タイ側が候補地としているサイトは旧日本人町跡地(約16,000m²)であるが所有権、インフラ及び考古学上の問題があり、これらの問題をタイ側で解決してサイトを決定する。
- (3) 本計画にかかわる施設完成後の維持管理のために必要な人員及び予算はタイ側で確保する。
- (4) 展示について基本構想はタイ側から提示する。

これらに基づいて昭和61年10月末にタイ政府より日本政府に対し、再度上述の項目を踏まえた無償資金協力にかかわる要請があった。

同要請書では展示の基本構想については、アユタヤの対外交流史とする方向で考え方がまとまってきた。また土地所有権についての法律的なつめ及び考古学的見地からの建築許可等の問題点については、明確にするまでに到らなかった。これから、関係者間で明確にすべく検討を重ねてゆくことになった。さらに昭和61年12月末日タイ側として本計画の推進母体となる“アユタヤ小委員会”がタイ政府内閣によって正式に承認され、委員長としてはアユタヤ県知事が任命されて、第1回の会合が昭和62年の1月に開催された。その際の討議されたなかで昭和62年9月26日に日・タイ修好100周年を迎えるに当り、その記念行事を予定しており、これに間に合うタイミングで調査の実施をして欲しい旨の要請を受け、その結果、日本政府としては早急にその具体策を講ずるための第二次事前調査を派遣することとし、昭和62年1月末、第二次事前調査団を派遣した。

3-2 計画の概要

- (1) タイ側実施主体……………アユタヤ県(内務省が支援)
- (2) 建設予定地……………アユタヤ市 日本人町跡地 敷地面積 16,000m²
- (3) 施設概要……………

展示スペース	700 m ²
収集・保存スペース	120
研究室、図書室	150
講義室	200
事務室	250

機 械 室	80
トイレその他	300
	<hr/>
	計 1,800

(4) 機 材

X線分析装置
 顕 微 鏡
 発 掘 用 具
 解説システム
 ビデオシステム
 スライドプロジェクター
 コピーマシンその他

(5) 展 示 内 容

1. アユタヤ王朝の歴史
 - ・意義, 政治, 社会, 経済
 - ・年表
2. アユタヤ王朝と諸外国の交流
 - ・アユタヤ王朝の外交
 - ・東西貿易の中継基地としてのアユタヤ
 - ・各外国人町の模型, 図面, 写真による再現
 - ・交易船の模型
3. 展 示 物

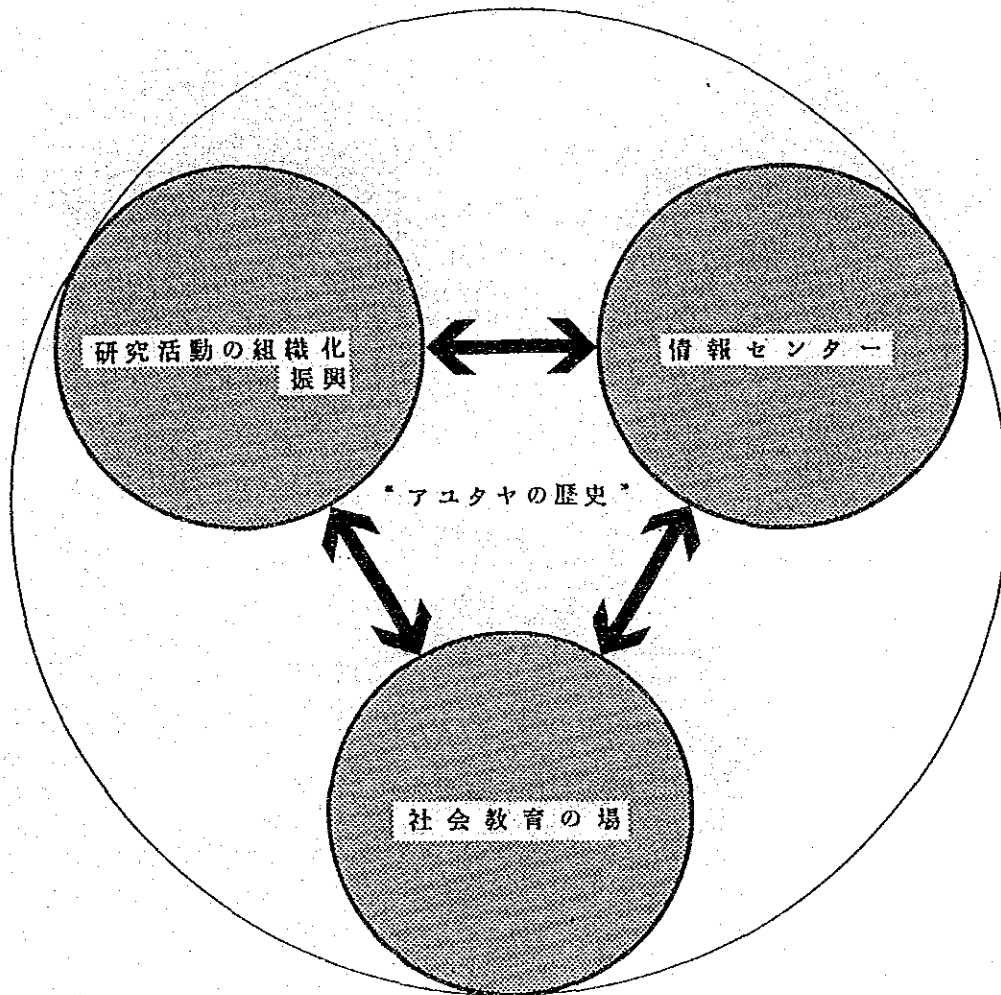
<ul style="list-style-type: none"> ・アユタヤ全景図 ・建 物 ・仏 像 ・陶 器 ・工芸品 	<ul style="list-style-type: none"> ・彫刻 ・日用品 ・着物 ・楽器 ・地図, 絵, 手紙その他
--	--

第4章 調査結果

4-1 資料館の目的と機能

資料館はアユタヤ王朝時代の歴史の全貌を学ぶ社会教育の場を提供することを目的として、資料収集、調査活動にもとづき、その歴史に関する情報センターとしての機能をも果たす。また、将来にわたり、タイ王国内外の教育・研究機能との協力によって、アユタヤ史に関する広範な研究活動を振興し、組織する機能を併せて果たすものとする。（資料-5 資料館基本構想）

(1) 目的と機能の概念図

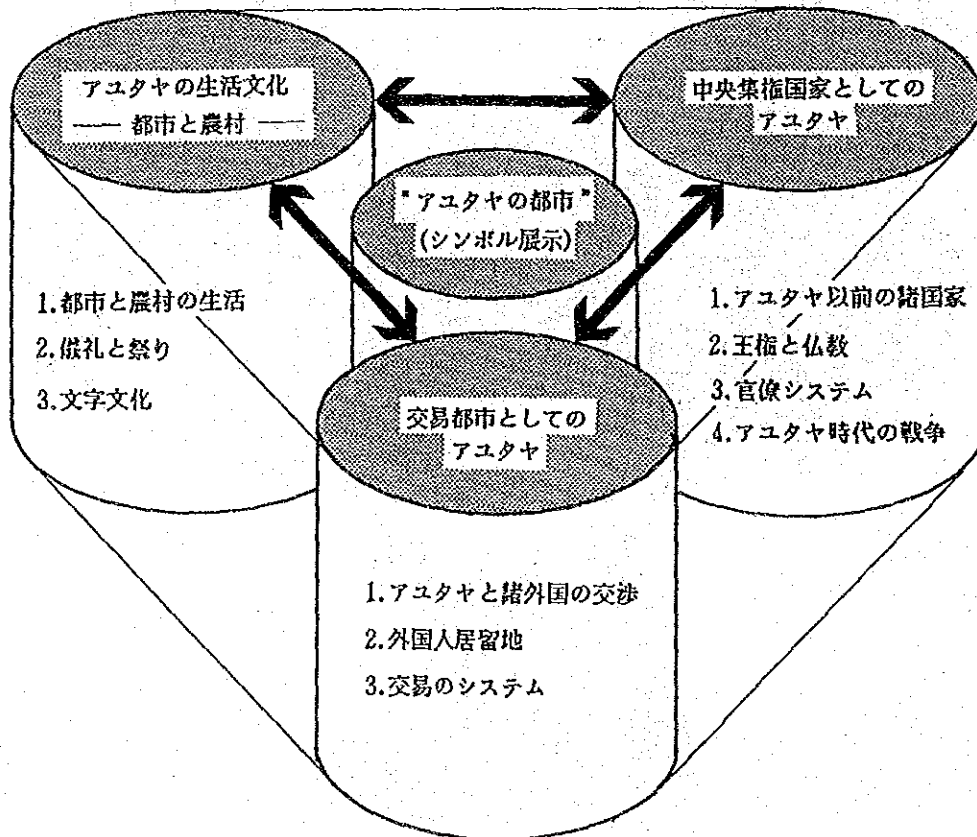


4-2 展示の基本構想

日・タイの学者グループを中心として、展示基本構想(仮)が作成された。その内容としてはアユタヤ時代の対外交渉、社会、経済、文化等にわたるあらゆる側面にわたって展示を行うと共に、アユタヤ地域の人々の生活を歴史的連続性の中で理解しながら、今日にも見られる民俗文化の諸相をも展示してゆく。これらの目的を実現するために、以下に示す三つの主要テーマに沿って展示構成を行なう。さらにそれらを統合した象徴展示としてアユタヤ都市の大規模モデルを中心部に配すると共に、それは各テーマごとの個別的トピックスとも関連させたものにする。

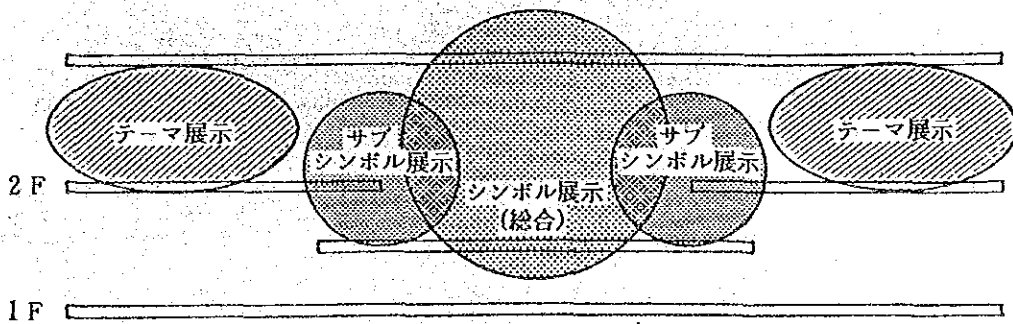
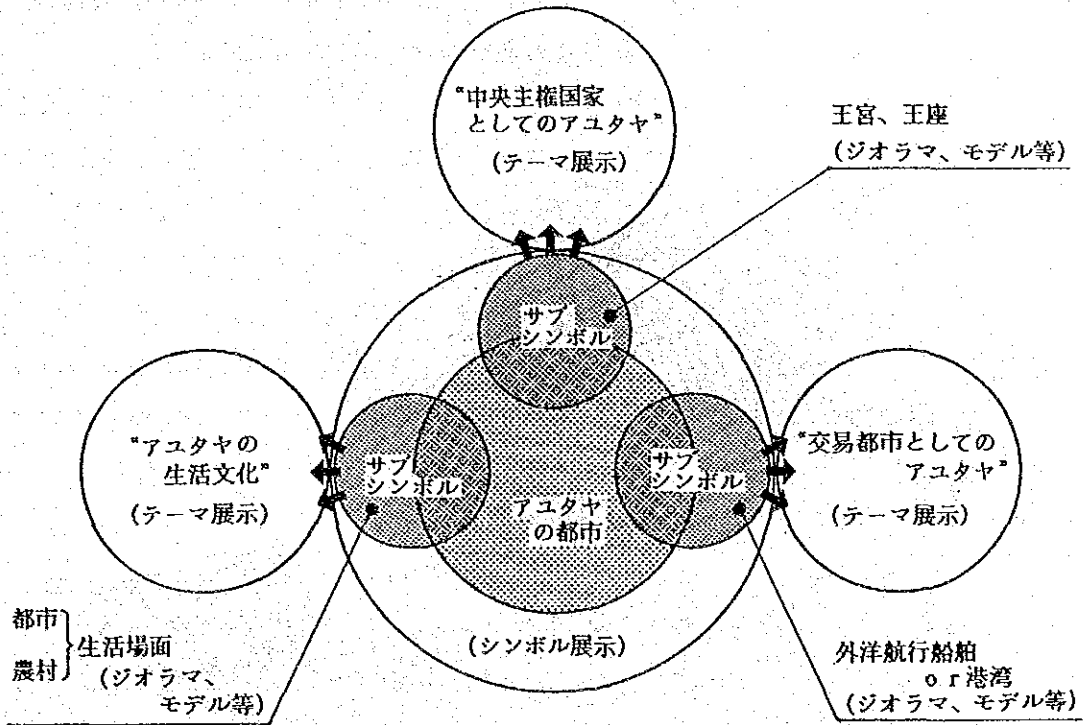
(資料-5 資料館基本構想)

(1) 展示テーマ(主要)の概念図



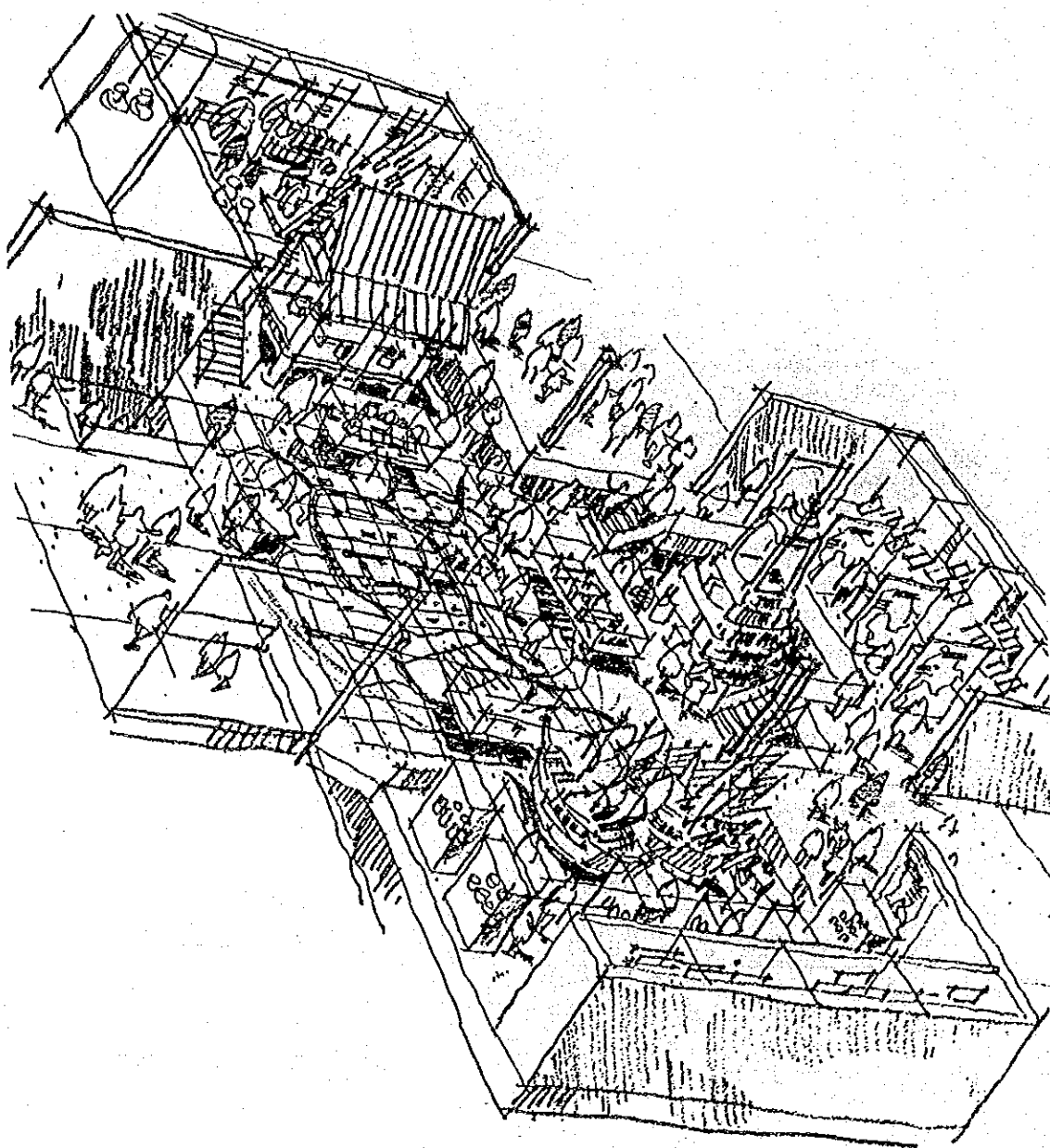
(2) 展示ゾーニング・プラン

アユタヤの歴史を象徴する展示として、都市の再構築があつて、その周辺には3つのサブシンボルが相互的に連続しながら、各テーマ展示への導入を図ろうとされる。



(3) 展示イメージスケッチ

展示の具体的展開は本調査設計で検討されるべきものであるが、展示というもののイメージを掌握するために、素案を作成してみた。広々とした吹抜け空間のエントランスホールに構成されたシンボル展示は、当然展示のイントロダクション機能も果たしつつ、他のテーマ展示の空間へ波状的に発展してゆく。一方各テーマ展示はその資料収集の内容に応じて、自在に対応ができるフレキシビリティに富んだ展示の構成が予想される。



4-3 展示資料調査の概要

この調査は日程の都合等により、アユタヤ地域及び、バンコック周辺にしほつて、記録写真を主体に収集を行った。

(1) アユタヤ地域

王宮、寺院遺跡群、国立博物館、チャオプラヤ河の河岸周辺の地形、家屋、寺院など

(2) バンコック地域

国立博物館、王宮殿、各種寺院、チャオプラヤ河水辺の生活形態、ジム・トンプソンの家、エンシェントシティ、ローズ・ガーデンなど

チャオプラヤ河に囲まれたアユタヤ島の遺跡群はかつてのロイヤルパレスを中心として、ある程度整備された区域と、現在もなお人々の住まいなどと隣り合わせて露呈している。これらの遺跡群の発掘調査、保存整備にあつているタイ政府芸術局の現地出先機関には、様々な発掘品をはじめロイヤルパレス周辺の復元模型等も展示されて訪問者へのサービスを行っており、これらは当然展示の主要資料となり得よう。またアユタヤ島に接するチャオプラヤ河の岸辺は、かつての水路をはじめとする水門、城壁、古い家屋など都市形成の形骸が自然環境の中にのこっており、資料としては今後のフィールド・ワークに期待ができよう。

また、河の外周の一角にアユタヤ時代の古い寺院が残っており、建築、パゴダ及び経蔵内部の壁画などが現存している。

国立博物館 (CHAO SAM PHRAYA MUSEUM) の展示物はアユタヤ王朝関係の貴金属製の装身具類をはじめ、各種陶磁器による工芸品、堅木製の建具及び素焼きの瓦等がある。また展示品の半数以上を占める仏像は全身立像、座像、首像、レリーフ状板など、大小さまざまな形態をしており、材質も石彫からブロンズ製および金箔をほどこしたもので、さらに 陀羅絵図や木製漆塗りの経典書庫などがあり、いずれも展示資料として、レプリカ製作の対称物となり得よう。

バンコック国立博物館 (NATIONAL MUSEUM, BANGKOK) にはアユタヤ王朝期の展示が通年史的にとりあげられているが、実物資料が比較的少ないので、特殊造型物 (ジオラマ) などによる歴史場面を再現しているが、その表現技術もさることながら、考証資料等が十分でなかったであろうと思われる単面的表現が目についた。また美術展示部内では、アユタヤ国立博物館と同様に大小様々な仏像をはじめ、仏石碑、経典書庫等仏教関連の展示物がほとんどであった。

アユタヤ王朝期と時代を異にするが、建築資料及び民俗資料的視点からバンコック地域の王宮、周辺寺院ならびにチャオプラヤ河周辺の水上生活を視察した。

特に王宮殿の配置はアユタヤ王宮をベシックプランとしてとり入れたといわれており、その都市空間の構成資料としても参考となろう。

水辺の都市生活はその自然環境の中で暮らす人々の生態を含めて民俗資料となり得る。見るべきものとしては、その他エンシェントシティの施設群がある。こちらは、タイ全域にわたる家屋

及びモニュメントを中心にその自然環境をも再現したものであり、特にアユタヤ期のものとしては、王宮殿の一分がやや縮小したサイズで再建されている。

また、地域及び時代はアユタヤのものと多少異なるが、現存するタイの農村家屋、都市の水上家屋等の建物群は参考資料となり得るであろう。

以上の外に資料としてはタイ側学者グループより提供された複写資料及び購入図書があるが、いずれもここ数日間に収集したものであって、展示の資料調査としては、限定されたものとならざるを得ない。

展示テーマを表現する実物資料及び多面的考証を必要とする特殊造型物の資料等の調査及び収集活動は当然のことながら本調査以降に委ねることになり、その地域も上記以外のピッツァフロップをはじめ範囲を広げることとなる。

4-4 敷地調査の概要

(1) 現況

アユタヤ旧日本人町跡地は西側をチャオブラヤ河、東側をアクセス道路に接し、河と道路を結ぶように一直線の歩道が敷地のほぼ中央を東西に貫いている。この歩道（コンクリート舗装）を除いた両側の地盤は低く、河岸の自然石のえん堤と共に、増水期には冠水するが、調査時（乾期）の水位は逆に地面より約2m低かった。

なお、敷地の東側約3分の2はブルドーザーにより土が削られて更に低く、雑草が生茂っている。その他の河添いの部分と歩道の両側には大樹が茂り、心地よい木陰を作っている。

敷地外であるが、北側に隣接する製粉工場はその景観があまり好ましくない上に、周辺に粉塵をまき散らしている。アクセス道路に関しては、当敷地よりアユタヤ市街地に向けてほぼ2km程が未舗装であって相当荒れた状況である。

敷地内の主だった構成物は次の通り。

境界フェンス、旧日本人町跡碑、歩道、灯籠、鳥居、山田長政精霊碑、参道、アズマ屋、休憩所、便所、旧日本人町と山田長政解説碑、棧橋、管理人家屋、各種樹木など（資料-7、資料-8参照）

(2) 現地調査

敷地調査の結果、資料館建設用地として既に遺跡の破戒された部分を利用することにして、ボーリング調査を行なうことにした。

なお、今後の計画推進のために必要な測量図を作成することとした。

4-5 計画用地の調査

(1) 資料館建設位置

日本人町跡地のうち、既にブルドーザーにより遺跡の破壊された部分を建設用地にすることを

現地において調査団、タイ日友好協会及びタイ国芸術局の立合い協議の上決定した。

右用地は遺跡として保存すべき巾約 8 m の東西にわたる部分で、南北に二分（資料－ 9 参照）されているが、当初から既に破壊地と目されている北側エリアを資料館建設用地とした。

敷地北側の製粉工場より多量の粉塵飛来が予想され、又景観上からも、資料館は右隣接部分をなるべく避けて、用地の南側に寄せて建設すべきであろう。同時に植樹等で十分カバーしたい。

右用地以外の敷地は遺跡として保存するため建物の基礎等を設けることは許されないが、片持梁や地上梁による空中利用は差支えないものと思われる。

(2) 地質ボーリング

(2)－ 1 ボーリングの位置及び発注

前記資料館建用地に 2 ヶ所、南側建設可能に 1 ヶ所計 3 本のボーリング位置（資料－ 9）を決定し、現地業者（DEE ENGINEERING CO, LTD 担当 DITDI PUTTORNGUL）に 1 月 29 日発注した。右位置は東西及び南北の両軸方向にわたり地層傾斜を示すべく指定した。

(2)－ 2 ボーリングの結果

2 月 20 日に現地業者より送付されたボーリング調査報告書（抜萃）（資料－ 10 参照）の通り。

(2)－ 3 地質解析

ボーリング柱状図よりみて、支持杭として期待できる地層は現地盤の地下約 20 m にある砂層と思われるので、2 階建程度でも鉄筋コンクリート造などの重量構造では長さ 20 m の支持杭が必要であろう。

しかし、鉄骨造などの軽量構造の場合は長さ 8 m 程度のものを摩擦杭としてやや数多く使用することによって建物を支持することも可能と思われる。

(3) 用地測量

(3)－ 1 測量調査及び発注

日本人町跡地の正確な寸法を示す敷地図面がタイ日友好協会にも存在しないため、将来のマスタープラン作成のために必要な測量図を現地業者（ボーリング業者に同じ）に発注した。

なお、同跡地はタイ日友好協会により、ほぼ全域にわたり盛土の予定であるが、測量図は遺跡現状記録のためにも 25 m 間隔のやや細かい等高線を含むものとした。

又既存の樹木を最大限利用するために直径 10 cm 以上のものは測量図に記入せしめた。（資料－ 11 参照）

(3)-2 測 量 図

上記の条件で作成された用地測量図（1/200，同縮尺図1/500）（資料-11）は今後の設計に必要な精度を十分備えており，従来入手した敷地概略記録図と異り，実際にはかなり変形していることが判明した。これによりマスタープランや配置図の作成も可能であり，明確な等高線と共に盛土計画の資料としても利用できる。

4-6 マスタープラン

歴史資料館とタイ日友好協会によるその他の施設とは，その目的や資金等から本来別のものがあるが，同一敷地内に隣接して建設されるため相互の調和を計る必要があり，今回そのマスタープランを日本側で作成することで合意された。

(1) 敷地整備要素

(1)-1 護岸，棧橋

(1)-2 建造物（資料館，レストラン，スーベニアショップ，便所，霊廟，碑，等）

(1)-3 造園（盛土，既存樹木保存，植樹，歩道，駐車場，フェンス等）

以上の諸要素は資料館など一部を除いてほとんどタイ日友好協会側が行う工事であるがマスタープラン作成に当ってはその主旨に沿って日，タイ双方の当事者間で十分協議して行う必要がある。

同時に個々の設計及び施工に於いても相互に連絡を密にしていやしくも，完成後に視覚上の違和感を残すことのないようすることが必要であろう。

例えば護岸工事は堅牢さは勿論，河面よりの景観上，親水性にも考慮を払った計画によらなければならない。

(2) インフラストラクチャー

(2)-1 取付道路の拡巾及び舗装

(2)-2 電気（含動力用電気）

(2)-3 給排水

(2)-4 通信等

(3) マスタープラン概要図

マスタープランは次回の本調査に基づき作成されるものであり，今回の事前調査ではマスタープランに必要な敷地整備要素についてタイ日友好協会と協議する機会がなかったが，参考としてマスタープラン概要図（資料-13）を作成した。

4-7 資料館設計の基本構想

資料館の設計も次回の本調査後に行われるべきもので、今回の調査段階では資料館にかかわる設計データを入手するにいたらなかった。しかし展示構想と共に学者グループを中心とした協議の中では、その施設構想をも示唆する意見が述べられたので、ここに資料館設計の基本構想として、施設機能図及びその空間概念図を作成した。

(資料-14, 資料-15 参照)

さらに、施設の意匠及び設備設計のあり方として、次のような点が指摘された。

- (1) 建物の外観イメージとしては、必ずしも伝統的な意匠にとらわれることなく、気候、風土に適したものが望まれよう。
- (2) 内部の特に展示空間としてはシンボル展示を中心として各テーマゾーンが有機的につながり、かつ相互の変化に対応できるシステムが望まれる。
- (3) 構造、機能及び設備等はその維持管理を容易にするために、より簡素なものを選び、その地域条件に見合ったものにしたい。

4-8 今後のプロジェクト推進にあたって

- (1) プロジェクト推進において、その完成にいたるまで、日タイ双方の協力体制が大切であり、そのためには、タイ王国の展示に関連する諸条件の現状を掌握した上で、円滑な対応策を講ずることが望ましい。本調査の段階でより明確にすべき項目は次の通りである。

(1)-1 展示資料の収集に関連するデータ

諸法規、事務的手続き、輸送方法、複製物制作の諸条件など。

(1)-2 展示設計業態の現況

特殊造型物、グラフィック、その他展示メディアの設計。

(1)-3 展示制作業態の現況

特殊造型物、グラフィック、その他展示メディアの制作。

- (2) 資料館がタイの歴史をテーマとしてあつかう以上、自国の歴史研究の成果をふまえた客観性のある展示が必要とされよう。

そのためにはこの施設が単なる無償援助計画としての建設にとどまらず、特に展示はその構想に基づいて具体的なシナリオづくりから、それらを立証できる考証資料の集成をはじめ、巾広い資料収集、調査、研究等の反映された活動が前提となろう。

公開展示を通して人々に感動と効果的な情報伝達を成しとげるためには、右にふれた一連のソフト・ウェアづくりが重要な鍵をにぎっている。したがって展示の準備・実施段階からその技術、方法論においても、主体者であるタイ側スタッフの十分な対応策が急がれるため、このプロジェクトが従来の無償援助の上に、さらに日本の技術援助などによる研修制度の運用により、当計画の円滑な推進が切に望まれる。

(3) 資料館建設計画の推進にあたっては、日タイ両国にわたる関連機関を効率的に機能させるために、次に示す組織表のごとき推進母体が必要であろう。

この組織表では特に、タイ側を主体とした資料館設立準備室が重要であろう。さらに将来とも館の運営にたずさわる人物として、合意議事録でも述べられている通り、準備室長の人選が急がれている。

なお、業務の的確な遂行を図るために、現段階における予測にもとづき工程表を作成した。
(資料-16, 資料-7 参照)

資 料 編

MEMORANDUM OF DISCUSSIONS

ON

PRELIMINARY STUDY FOR AYUDHAYA HISTORICAL
STUDY CENTER PROJECT IN THE KINGDOM OF THAILAND

Japan International Cooperation Agency (JICA), an official agency responsible for implementation of technical & economic cooperation program of the Government of Japan, has conducted the preliminary study on the Ayudhaya Historical Study Center Project (the Project) in close cooperation with the Thai authorities concerned, from August 17 to 27 1986.

The team headed by Mr. Masaharu Yoshida, Assistant Director, Grant Aid Division, Economic Cooperation Bureau, Ministry of Foreign Affairs, held a series of discussions and exchanged view with Thai authorities concerned on the Project.

The Japanese team explained that the significance of the purpose of the Project requested by the Government of Thailand as the high priority project under the Three-year Indicative Plan, is fully recognized. It also stated that the Project should primarily be considered from the stand point of Thai side's initiatives on both administrative and academic matters, especially because the Project deals with history, a very sensitive area.

The Thai side stated that it shares the same view with that of the Japanese side, and that a preparatory committee as an administrative and academic contact point should be established, under the chairmanship of the Governor of Ayudhaya Province, a tentative member list is as shown in

Annex I.

Furthermore both parties confirmed the following points:

1. The purpose of the Project is to provide opportunities to study the history of Ayudhaya for Thai people and foreigners through exhibitions.

2. The site of the Project, proposed by the Thai side, at present, is in the south of the city of Ayudhaya and its total area is about 7 rai. The Thai side will make a proposal of the definite site as soon as possible. Legal problems pointed out by the Ayudhaya government concerning the ownership of land should be settled by the Thai side.

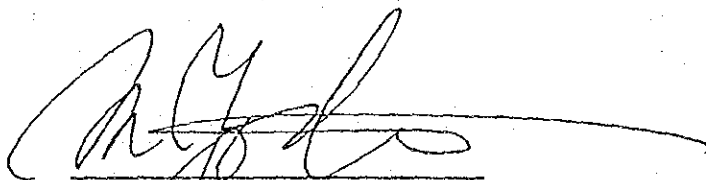
Land preparations including infrastructures should be done by the Thai side.

Archaeological problems, pointed out by the Fine Arts Department, should be settled among the Thai Government.

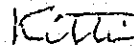
3. Budget appropriation and securing necessary staff should be made by the Thai side for maintenance.

4. Basic idea of exhibition should be presented by the Thai side.

5. The Thai side should present to the Japanese side the results of its examination on the above mentioned points 2 & 4 with in two months.



Mr. Masaharu Yoshida
Leader of the Japanese Mission



Mr. Kitti Pratoomkaew
Provincial Governor of
Ayudhaya

Prof. Komei Sasaki	National Museum of Ethnology
Prof. Shigeharu Tanabe	National Museum of Ethnology
Mr. Masaharu Yoshida	Ministry of Foreign Affairs
Mr. Hideaki Hirano	Embassy of Japan
Mr. Norio Matsuoka	Ministry of Education
Mr. Naoyoshi Sasaki	Japan International Cooperation Agency

Annex I

Sub.Lt. Kitti Pratoomkaew	Provincial Governor of Ayudhaya
Mr. Pisit Chaleonwong	Fine Arts Department
Mr. Patipat Pumpongpaet	Fine Arts Department
Mrs. Rima Bumpongpaet	Fine Arts Department
Mr. Prasit Lulittanon	Thai-Japanese Association
Mr. Bamroong Hemawanakool	Chief of Finance
Mr. Prasarn Moonrasarn	Education
Mrs. Sumalee Suwangnasang	Cultural Center
Mr. Prapis Kongsompong	Chairman of City Assembly
Mr. Chatthip Nartsupha	Chulalongkorn University
Mrs. Prapprung Kongchana	Srinakharinwret University
Mr. Wangchai Kirddan	Public Relation
Mr. Anupart Nikrodha	Secretary of the Meeting
Mr. Buntao Suksatit	Deputy Governor of Ayudhaya

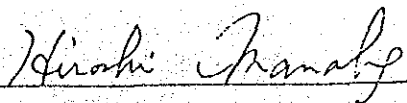
MINUTES OF DISCUSSIONS
OF
THE SECOND PRELIMINARY STUDY
ON
THE PROJECT FOR CONSTRUCTING THE AYUTTHAYA HISTORICAL STUDY CENTRE
IN
THE KINGDOM OF THAILAND

In response to the request of the Government of the Kingdom of Thailand, the Government of Japan decided to conduct a Second Preliminary Study on the Project for Constructing the Ayutthaya Historical Study Centre and entrusted the study to the Japan International Cooperation Agency (hereinafter referred to as "JICA"). JICA sent to the Kingdom of Thailand the study team headed by Mr. Hiroshi MANABE, official, Ministry of Foreign Affairs of Japan, from January 21 to January 30, 1987.

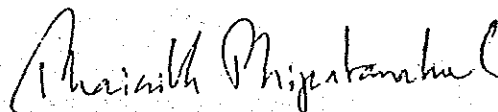
The study team had a series of discussions on the Project with the officials and scholars concerned of the Government of the Kingdom of Thailand headed by Prof. Dr. Phaisith Phipatanakul, Permanent Legal Advisor, Ministry of Interior and conducted the site survey.

As the result of the study both parties agreed to recommend to their respective governments that the major points of understanding reached between them, attached herewith, should be examined towards the realization of the Project.

Bangkok, January 29, 1987



Mr. Hiroshi MANABE
Leader of the Second Preliminary
Study Team



Prof. Dr. Phaisith Phipatanakul
Permanent Legal Advisor of
Ministry of Interior

ATTACHMENT

1. The Thai-side informed the Japanese Team that the Task Force of the Ayutthaya Historical Study Centre Sub-Committee has already been officially established and the Cabinet of the Government of the Kingdom of Thailand gives this Task Force the full endowment to work out the project by consulting with the Japanese side. The list of the members of the Task-Force is shown in Appendix I. and the list of the members of the Sub-Committee for the Construction of the Ayutthaya Historical Study Centre which is composed of twenty five members totally, is also shown in Appendix II. The Japanese Team informed the Task Force that the Government of Japan established the Supporting Committee composed of three scholars shown in appendix III.

2. The Task Force reported to Committee for the Celebration of Thai-Japanese Centennial Anniversary on January 27, 1987, the major points of understanding reached by both parties during the discussions of the second preliminary study, and Committee fully approved the report on that day.

3. The purpose of the Project is to provide the opportunities for Thai people primarily and foreign visitors to learn the history of Ayutthaya in general through the exhibitions and its activities so that they could promote their understanding on the history of the Kingdom of Thailand.

4. The implementation of the Project is under the Ayutthaya Provincial Authority, assisted by an Executive Board which might at least be composed of the officials of the Ministry of Interior and the Department of Fine Arts, Scholars, and members of the Thai-Japanese Association. The Executive Board will be formed in due course, which nominate the Director of the Centre who should be the personnel with academic background on history. The Director shall be assisted by Advisory Committee whose members shall be appointed later by the Executive Board.

5. The site of the Project is located in the area, so-called the Old Japanese Village in the south of central Ayutthaya. The total area of the village is around 7.5 rais. Taking account of the letter of

H. Gm

Alainith

Mr. Thaveesak Senanarong, the Director-General of the Department of Fine Arts, on October 15, 1986, addressed to Mr. Sommai Hoontrakool, the President of Thai-Japanese Association, both parties agreed to use land of the northern half of the proposed area that the Government of the Kingdom of Thailand has already approved in the letter mentioned-above from archaeological point of view. The construction plot of the Centre is shown in Appendix IV.

6. With regard to the use of the site, the Government of the Kingdom of Thailand through the Committee for the Celebration of Thai-Japanese Centennial Anniversary confirmed to the Team that the implementation agency, the Ayutthaya provincial authority is legally allowed to use the land as long as the Centre exists in the site. The permission was already conveyed to Mr. Chaiwat Hutacharoen, the Governor of Ayutthaya from Mr. Sommai Hoontrakool, the President of Thai-Japanese Association, on October 15, 1986 in the letter form.

7. Since this project is implemented under its responsibility, the Ayutthaya Provincial Authority is willing to appropriate the annual budget and to recruit the personnels who are indispensable for maintenance and operation of the Centre. The allocation of the budget and the assignment of the necessary numbers of the staff should be adequately determined by the provincial authority advised by the Executive Board.

8. The function of Centre, which both parties regard as the most important part of the Project, is firstly to display various exhibits relating to the history of Ayutthaya (the detailed objectives for the exhibitions will be referred to later), and secondly to act as reference centre for the information on the history of Ayutthaya as much as possible. In the future, the Centre will be expected to promote some research activities in cooperation with various research organizations such as universities and museums which are carrying out the academic research on the Ayutthaya history. The cooperation system between the Centre and these supporting organizations should be worked out in detail in the future by the Executive Board. The Team introduced to the Task Force the scheme of the cultural grant aid under which the research equipment could be probably provided, if both sides regard it necessary after such a cooperative system will be established.

Thaveesak

H. G.

9. With regard to the exhibitions of the Centre, the Task Force is requested by the Team that they have to supply the appropriate information and materials relating to the Ayutthaya history as much as possible to the Japanese side in order that the latter can work easily toward the realization of the Project. On the other hand, the Japanese side will inform the Thai side of the list of materials relevant to history of Ayutthaya which are held in Japan. The Task Force will give the Japanese side the list of the materials and objectives that can be displayed or used in the Centre by the middle of April.

10. The display in the Centre will be divided into the three main parts as follows: (1) Ayutthaya as the port city, (2) centralised government of the Ayutthaya kingdom, and (3) the life of the people in Ayutthaya. The detailed exhibits will be shown in Appendix V.

11. The Thai side confirmed to the Team that they are fully aware that they are responsible for the plan for the improvement of the Old Japanese Village surrounding the Ayutthaya Historical Centre borne by the Government of Japan in the grant aid form. The Japanese Team expressed the views that the plan for improvement of the Old Japanese Village by the Task Force should have harmonious content with the Centre. The Task Force requested to the Japanese Team that the basic design team might work out not only the plan for the Centre itself but also for the plan for the improvement of the Old Japanese Village which is borne by the Task Force so as to have the better unified picture in the form of a master plan of the whole project.

12. With regard to the plan for the improvement of the Old Japanese Village, the Task Force expressed the views that site work (clearing and reclamation, river-side retaining) necessary for the commencement of the construction by grant aid, and the construction of the small restaurant with souvenir shop, the other necessary constructions such as fence and gate, garden landscaping, pier should be included in the plan and these things should be taken into full consideration at the time of basic design study. The Japanese side confirmed to the Task Force that the former understood the latter's request positively but also said that the cost for detailed design and the construction of the things concerned should be borne by the Task Force.

M. In

Marshall

13. The Task Force disclosed their plan of fund-raising to cover their obligations and promised to the Japanese Team that they start collecting the fund soon and further steps for fund-raising will be taken in Tokyo as soon as possible. The Task Force showed to the Japanese Team that the amount of fund donated from private sectors expected to be on hundred fifteen million Yen. The Japanese side took note of it. The Task Force further informed the Team that the Government of Thailand is exploring the possibility in providing fund to support the project in order to promote the tourism in this area. The final result of the discussions of the Government of Thailand in this matter will be conveyed to the Japanese side in the near future.

14. With regard to the infrastructure, both sides agreed as follows: the Thai side should (1) provide electricity to the Centre, and (2) repair and expand access road to the site.

15. The Task Force expressed their desire during the discussions that they need to send Thai specialists visiting Japanese institutions in order to acquire sound knowledge and sufficient information before commencing their duties for exhibition works. They also make a request to get some Japanese experts assigned to the Project to work out the details of the exhibition during the period of display works.

It is stressed by the Task Force that research activities of the Centre is crucially needed to fulfil its primary function for social education in the country. In this connection the Task Force would be ready to organize wide range activities in cooperation with both domestic and foreign institution, provided with possible aid from the Japanese government assigned to the Centre to promote further research activities after the completion of the Project.

Handwritten initials

Thailand

The Academic Basic Plan for the Ayutthaya Historical Study Centre

In response to the Thai Government's request for Japanese Government cooperation for establishing the Ayutthaya Historical Study Centre at the Japanese village of Ayutthaya province in 1986, the Japanese government has sent a second mission composed of officers from the Ministry of Foreign Affairs, JICA, technical experts and academic specialists to hold discussions with various Thai representatives from the Ministry of Interior, the Ministry of Finance, the Department of Fine Arts as well as the Thai-Japanese Association personnels and scholars between January 2 - 19, 1987.

On January 23 and 27, 1987, Thai and Japanese academic specialists exchanged points of view during the discussions dealing with the function and role of the Ayutthaya Historical Study Centre, and with the preparation for its exhibition. The basic idea of this project can be summarized as follows:

1. Function and Role of the Centre The Ayutthaya Historical Study Centre will be a centre with the purpose of providing social services for extramural education. The centre will organize an exhibition on the history of Ayutthaya on the basis of historical facts. The centre is, therefore, required to organize data collecting and research activities in preparation for the exhibition and its possible changes in the future.

Thus, the Centre will fulfill its basic role for social education, through its function as a historical information centre and its capacity to provide support for research activities on the history of Ayutthaya.

2. Thematic Exhibition From the academic point of view, the thematic exhibition should clearly show a comprehensive picture of the Ayutthaya period and some of its continual features up to the present time as in the following topics:

1) Ayutthaya as a Port City It is due to the fact that foreigners who came to contact Thailand during the Ayutthaya period perceived Ayutthaya as such.

H. Gm

Phaiwit

a) Details of Exhibition

The presentation of relations between Ayutthaya and foreign countries in Asia including China, Japan, and the Moors, the neighboring countries such as Burma, Laos, Khmer, Vietnam and Malaysia, as well as the European countries who travelled to Ayutthaya, namely Portugal, Holland, Great Britain and France.

b) Materials for Exhibition

There will be a city plan of Ayutthaya, old maps, trade items such as silver coins, models of different kinds of ships, pottery and jugs. These items can be studied at the National Museum, in private museums and collections, and in various libraries such as the National Library, the Siam Society Library etc.

- 2) Ayutthaya as a Centralised State Ayutthaya was not only a port city and an old capital of Siam but also a state with special features. Ayutthaya held a centralised power and administration systems dominating the entire country.

a) Details of Exhibition

This theme can be divided into some topics as follows:

Pre-Ayutthaya States

These includes Lopburi, Nakhon Prathom, Sukhothai, Chiang Mai and other muangs.

Kingship, Nobility, Religions

All the above establishments played important parts in the development of Ayutthaya culture as a great tradition.

Bureaucratic System

This consists of the central and provincial administration and the status system.

Warfare in the Ayutthaya Period

The organization of an exhibition of important wars of the period is planned.

H. H.

Phaisit

b) Materials for Exhibition

The exhibition will consist of maps, aerial photographs, a objects and pictures of royalty, nobles and religious articles, such as models of the Royal Palace, throne hall, utensils, Buddha images and paintings. There will be charts of the bureaucratic system, historical documents such as the Ayutthaya code of law and various kinds of weapons.

- 3) Life of Ayutthaya: Society and Culture This part is to show the various ways of life in the Ayutthaya period. It also includes artifacts and pictures showing the life of the people in the Ayutthaya area in various periods up to the present.

a) Details of Exhibition

This can be sub-titled as follows:

City and Village Life

To show settlements of local people, foreign settlements, industrial sections, market, farming village along riverlines and canals, etc.

Ritual and Festival

An exhibition of rituals and festivals seen as a little tradition, which were held during the Ayutthaya period, such as spirit cults and boat races, Buddhist festivals, e.g. "Thet Mahachat", "Songkarn". There will be musical instruments and popular games.

Literacy and Literature

An exhibition on Ayutthaya literature, historical documents, "Khoi" manuscripts, " Bai Lan" manuscripts

b) Materials for Exhibition

Set up models showing both city and village life and models of different types of houses; farming tools, cooking utensils, cookpots, jugs, baskets, fishing equipments; ox-carts, boats for use in rivers and canals, and music instruments.

N. In

Phucill

- 4) Exhibition of large-scale model of Ayutthaya This large model will be a major symbolic object, rather independent of the individual exhibitions mentioned above, but firmly connected with each theme. It will show geographical details of the Ayutthaya area, consisting of natural environment such as the rivers, canals, and cultural aspects of the inhabitants including local and foreign settlements, community life, monasteries, commercial areas, toll gates, and inland trade.

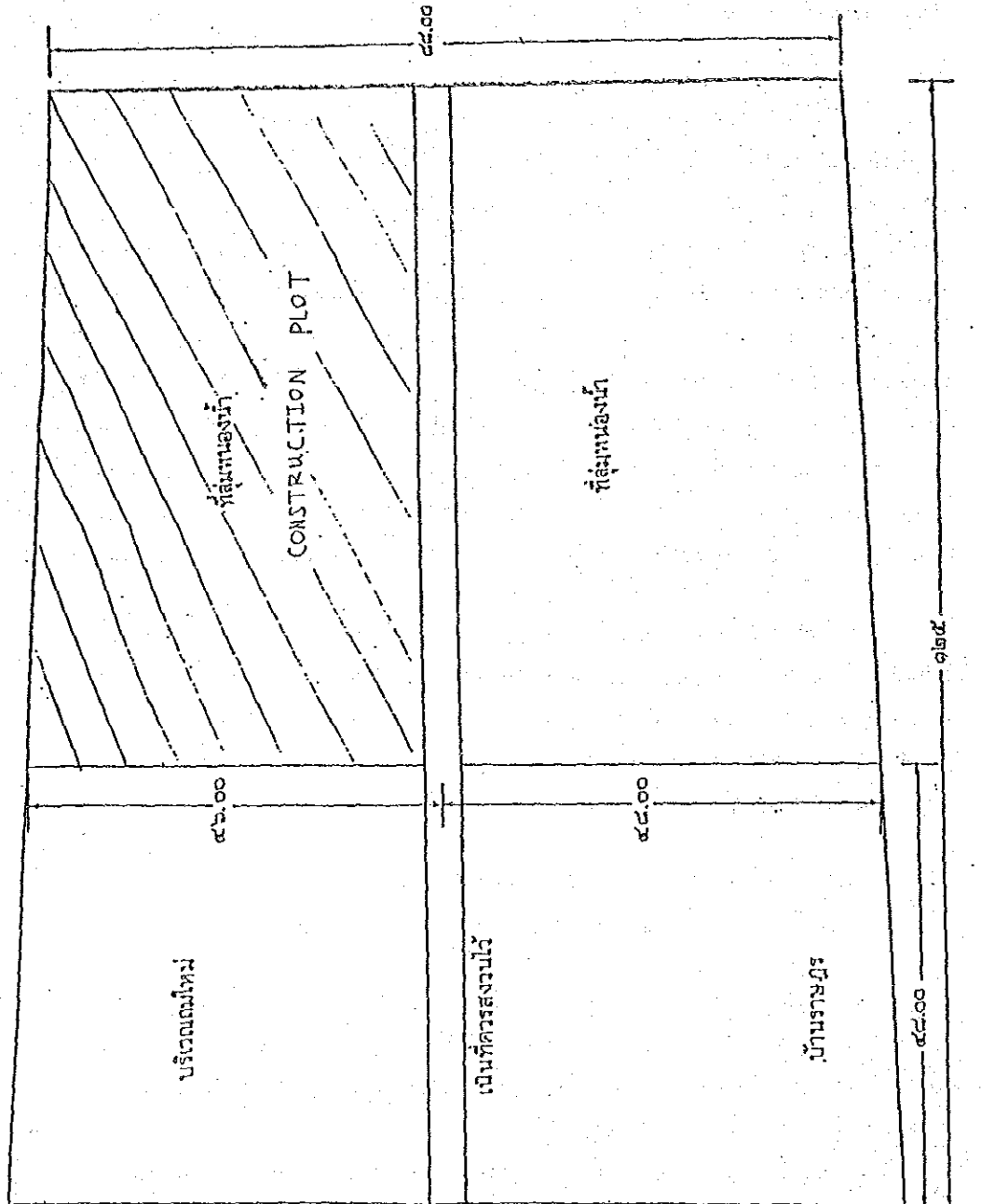
The function, role and organization of the exhibition at the Ayutthaya Historical Study Centre, as stated above, will have a special feature, different from other educational institutions, by providing social services and facilities for extramural education. The exhibition at the centre will help bring about understanding, in a concrete form, of the history of Ayutthaya for the general public. Because this exhibition is to be planned and organized on the basis of wide range data collecting activities, the centre will become an information centre focusing on the history of Ayutthaya. Together with this function, it will also provide support for in-depth and broad research on Ayutthaya history in cooperation with other academic institutions.

The academic specialists are firmly confident that this historical study centre will be not only extremely beneficial and useful to the Thai society, but also will set up an example in establishing educational and academic institutions with similar functions and organizations in other regions of Thailand.

H. Gm

Phaisith

THE CONSTRUCTION PLOT OF THE CENTER



ผังผังแบบปรับปรุงบริเวณแหล่งประวัติกีฬ
 ศาลศรีบ้านญี่ปุ่น
 จ. หนองคาย

(111-45744)
 11/11/11/11/11/11

N. 9

資料一 2 調査団の構成

調査団（第1次事前調査）の構成

吉田雅治（団長）	外務省経済協力局無償資金協力課課長補佐
佐々木高明（ ）	国立民族学博物館教授
田辺繁治（博物館施設）	国立民族学博物館助教授
松岡憲雄（運営管理）	文部省学術国際局研究機関専門職員
佐々木直義（計画管理）	国際協力事業団無償資金協力計画調査部基本設計調査第2課

調査団（第2次事前調査）の構成

真鍋寛（団長）	外務省経済協力局無償資金協力課
佐々木高明（アドバイザー）	国立民族学博物館教授展示構成計画
田辺繁治（アドバイザー）	国立民族学博物館助教授資料館構想計画
船山考一（事業計画）	外務省経済協力局東南アジア第1課
佐々木直義（計画管理）	国際協力事業団無償資金協力計画調査部基本設計調査2課
石原堅次（展示）	（株）乃村工芸社文化施設事業部
佐藤正己（建築）	（株）乃村工芸文化施設事業部

資料-3 調査日程

月 日	場 所		摘 要
1/21	日本 → タイ王国 バンコック	午前	移動日 成田TG.641 AM 12:15 発 Bangkok PM 5:30 着
		午後	調査団事前打合せ
22	タイ・バンコック	午前	JICA事務所挨拶・打合せ・大使館打合せ
		午後	タイ側タスク・フォースとの仕議 (施設のあり方, 他…)
23	タイ・バンコック	午前	タイ側タスク・フォースとの会議(展示構想検討)
	アユタヤ	午後	現地視察, アユタヤ県庁で会議及び会費 (旧日本人町跡地サーベイ, 他)
24	タイ・バンコック	午前	国立博物館視察(アユタヤ王朝時代)
		午後	アンシェントシティ視察, タイ日協会との打合せ
(日) ²⁵	タイ・バンコック	午前	国立博物館視察, 王宮, 主要寺院視察
		午後	ローズガーデン視察, 調査団中間打合せ
26	タイ・バンコック	午前	大使館行(大使への挨拶) 社会教育文化センター視察
		午後	タイ側タスク・フォースとの会議 (施設のあり方, 他総合的事項)
27	タイ・アユタヤ	午前	現地視察及び会食 (敷地の測量, ボーリングの仮発注)
	バンコック	午後	(都市遺跡及び周辺サーベイ)タイ側タスク・フォ ースとの会議(展示構想)
28	タイ・アユタヤ	午前	アユタヤ国立博物館視察, 王宮遺跡群視察
	バンコック	午後	書店行 資料収集, JICA主催会食パーティ
29	タイ・バンコック	午前	調査団最終打合せ(展示関連の対応策)
		午後	合意書調印式(産業金融公社); タイ日協会主催会 食パーティ, 測量, ボーリングの発注
30	タイ・バンコック→日本	午前	移動日 Bangkok TG740 AM 10:30 ~ 発
		午後	成田 PM 5:30 着

資料-4 タイ王国関係者リスト

タスクフォース

- | | | |
|-----|--|--------|
| 1. | Prof. Dr. Phaisith Phipatanakul
Permanent Legal Advisor
Ministry of Interior | Head |
| 2. | Mr. Manas Leeviraphan
Inspector-General
Ministry of Finance | Member |
| 3. | Mr. Jiroj Itharatana
Department of Technical and Economic Cooperation | Member |
| 4. | Mr. Vichien Suwatti
Deputy Governor
Ayutthaya Province | Member |
| 5. | Mr. Bantau Susathit
Ayutthaya Provincial Secretary | Member |
| 6. | Mr. Cathai Vicharnsricha
Ayutthaya Provincial Office | Member |
| 7. | Assoc. Prof. Dr. Dhida Saraya | Member |
| 8. | Assoc. Prof. Srisakra Vallibhotama | Member |
| 9. | Asst. Prof. Plublung Kongchana | Member |
| 10. | Mr. Junjiro Nishino
Thai & Japanese Association | Member |
| 11. | Mr. Prasit Lulitanon
Thai & Japanese Association | Member |

- | | | |
|-----|--|------------------------------|
| 1. | Mr. Chaiwat Hutachareon
Phra Nakhon Si Ayutthaya
Provincial Governor | Chairman of teamworkers |
| 2. | Prof. Dr. Phaisith Phipatanakul
Permanent Legal Advisor of
Ministry of Interior | Advisor to teamworkers |
| 3. | Mr. Manas Leeviraphan
Inspector-General of Ministry
of Finance | - do - |
| 4. | Assoc. Prof. Dr. Chatthip Narthsupa | - do - |
| 5. | Mr. Vichien Suwatti
Phra Nakhon Si Ayutthaya
Deputy Provincial Governor | Vice Chairman of teamworkers |
| 6. | Mr. Bantau Susathit
Phra Nakhon Si Ayutthaya
Deputy Provincial Administrative Organization | - do - |
| 7. | Mr. Praphit Kongsompehong
Speaker of Phra Nakhon Si Ayutthaya
Provincial Council | - do - |
| 8. | Mr. Thammasak Rotjanasonthorn
(Representative) of the Tourism
Authority of Thailand | a teamworker |
| 9. | Mr. Junjiro Nishino
Mr. Prasit Lulitanon
(Representative) of the Thai-Japanese
Association | - do - |
| 10. | Lecturer Sumalee Suvansang
(Representative) of Phra Nakhon
Si Ayutthaya Provincial Cultural Center | - do - |
| 11. | Mr. Jiroj Itharatana
(Representative of the Department of Technical
and Economic Cooperation | - do - |
| 12. | Mr. Suvit Keowkase
Phra Nakhon Si Ayutthaya
Provincial Education Officer | - do - |
| 13. | Mr. Sawat Chittrong
Phra Nakhon Si Ayutthaya Provincial
Land Officer | - do - |

- | | | |
|-----|---|--|
| 14. | Mr. Patipat Pumpongpaet
Chief of Phra Nakhon Si Ayutthaya
Historical Park Project | a teamworker |
| 15. | Lt. Charoon Buachum
Phra Nakhon Si Ayutthaya
District Officer | - do - |
| 16. | Assoc. Prof. Dr. Dhida Saraya | - do - |
| 17. | Assoc. Prof. Srisakra Vallibhotama | - do - |
| 18. | Lecturer Dr. Charnwit Kasetsiri | - do - |
| 19. | Lecturer Sumalee Suvansang | - do - |
| 20. | Asst. Prof. Kuakoon Yuenyong-anand | - do - |
| 21. | Mr. Piset Jiajunphong
Head of Administrative Section
Division of Archeology Department
of Fine Arts | - do - |
| 22. | Mr. Pathai Vicharnpricha
Chief of Phra Nakhon Si Ayutthaya
Provincial Officer | a teamworker and Secretary |
| 23. | Asst. Prof. Plubplung Kongchana | a teamworker and assistant
to the secretary |
| 24. | Mr. Bamroong Hemwanakul
Financial Section Chief of Phra Nakhon
Si Ayutthaya
Provincial Administrative Organization | - do - |
| 25. | Mr. Anuparp Nikratha
Administrative Section Chief of
Phra Nakhon Si Ayutthaya Provincial Office | - do - |

日本国学者グループリスト

1. 佐々木 高明 国立民族学博物館教授
2. 田 辺 繁 治 国立民族学博物館助教授
3. 石 井 米 雄 京都大学教授

資料-5

アユタヤ歴史資料館基本構想

—事前調査(第2次)の報告と所見—

国立民族学博物館 教授 佐々木 高明
同 助教授 田 辺 繁 治

アユタヤ歴史資料館建設計画事前調査(第2次)の目的は、本プロジェクトの背景、内容、実施体制を明確にするとともに、資料館そのものの目的・機能を明らかにし、その展示内容に関する基本構想(仮)をとりまとめることであった。資料館の目的・機能および展示基本構想(仮)については、主としてタイ側タスク・フォース(実行委員会)の学者グループと日本側調査団との討議によってまとめられ、タイ側タスク・フォースもそれを承認した。また同時に、展示の準備・実施における、いくつかの要請事項がタイ側から提出された。それらの概要は合意書に見られるとおりである。

ここでは、それらの合意事項のうち、特に、Ⅰ資料館の目的・機能、Ⅱ展示基本構想(仮)、Ⅲ展示の準備・実施プログラムと要請事項に焦点を合わせ、主要な点を整理して報告するとともに、今回の事前調査に参加した学術顧問としての立場から所見を述べる。これらの諸点を明らかにすることによって、来るべき基本設計調査を含む本プロジェクトの実施計画が、遅滞なく進行することを期待するものである。

I アユタヤ歴史資料館の目的と機能

アユタヤ歴史資料館(日本側仮プロジェクト名、以下「資料館」と略す)は、タイ側では、英語名: Ayutthaya Historical Study Centre (タイ語名: Sunsuksa Prawattisat Ayutthaya) と呼ばれる。

資料館設立の目的は以下の3点である。

- 1) 資料館は、タイ国民および、そこを訪れる外国人に対し、展示と資料館の諸活動を通じて、アユタヤの歴史の全貌を学ぶ社会教育の場を提供することを目的とする。
- 2) 資料館は、展示準備作業および完成後の資料収集・調査活動にもとづき、アユタヤ史に関する情報センターの機能を果たす。
- 3) 資料館は、将来において、タイ国内および国外の教育・研究機関との協力によって、アユタヤ史に関する広範な研究活動を振興し、組織する機能を果たす。

所見

資料館の最重要な目的は 1) であり、従来一部の意見としてあった、日-タイ交渉史を中心とする内容ではなく、より広くタイ国史の最も栄光ある時代であるアユタヤ史の全貌をあつかうことで、タイ、日双方とも合意した。2) 本資料館は当然のことながら、アユタヤの歴史資料について、少なくともその主要なものについての情報を十全に整えねばならない。それなくしては展示の構想を進める事も、それを準備することも不可能である。こうして収集され、さらに開館後もひきつづき調査・整備された諸資料については、それがひろく公開される必要がある。そのことによつて、換言すれば、この資料館が情報センターの機能を有することによつて、タイ国の既存の博物館と異なったユニークな役割を果たすことにもなる。

3) 研究活動を組織する機能については、他の大学・博物館等との協力体制の確立を待つて果されるべきものである。したがって、その体制が確立されるならば、資料館の活動を内容的に充実させるために、資料館そのものだけでなく協力機関に対しても日本国政府の援助が行なわれることが望まれる。

II アユタヤ歴史資料館の展示基本構想(仮)

資料館の展示基本構想は、来るべき基本設計調査までに最終的に確定されるべきものであるが、今回の事前調査においては、その概要を示す「展示基本構想(仮)」が提出された。その内容は以下のごとくである。

資料館は、綿密な研究によつて解明された歴史的事実にもとづき、アユタヤ時代(1350～1767 A.D)の、対外交渉、社会、経済、文化等のすべての側面にわたる展示を行なう。また同時に、アユタヤ地域の人々の生活を歴史的連続性の中で理解するために、今日見られる民俗文化の諸相をも展示の中にもり込む。これらの目的を果たすため、資料館の展示は以下の三つの主要テーマに沿つて構成され、さらにいくつかのトピックスに分けられる。

1. 交易都市としてのアユタヤ

14世紀から18世紀にいたる国際的取引都市としてのアユタヤの繁栄の姿をタイ史料や諸外国の史料にもとづいて浮きぼりにする。

- 1) アユタヤと諸外国の交渉：中国、日本、イスラムの諸民族、ビルマ、ラオス、クメール、ヴェトナム、マレーとの関係；ポルトガル、オランダ、イギリス、フランスなどヨーロッパ諸国との関係
- 2) 外国人居留地：日本人町、オランダ人町、ポルトガル人町等
- 3) 取引のシステム：諸外国との取引、国内取引、港湾の構造・施設

<展示資料>：

対外交渉史のチャート、外国人居留地を示すアユタヤ都市プラン、古地図、通貨(子安貝、銀貨など)、交易品(鹿皮・サメ皮、漆、蘇木、錫、陶器)、各タイプの外洋航行船

船のモデル（中国型ジャンク船＝日本の朱印船もその一つ，ダウ船，西洋型帆船等）

2. 中央集権国家としてのアユタヤ

アユタヤは国際的交易都市であるばかりではなく，タイ史上初めて出現した中央集権的な統治システムを備えた国家であった。ここではアユタヤ国家の社会・経済・軍事の諸機構，さらに王権と仏教に関する展示が行なわれる。

- 1) アユタヤ以前の諸国家：ロブプリー，ナコーンパトム，スコータイ，チェンマイ他
- 2) 王権と仏教：アユタヤにおける大伝統の諸相
- 3) 官僚システム：中央・地方行政機構および，身分制度
- 4) アユタヤ時代の戦争

<展示資料>：

アユタヤ前国家の都市プラン・地図，航空写真，同時代ヨーロッパ人の図版（王，貴族，王宮，仏教），アユタヤ王宮のモデル，玉座のモデル（Phrathinang Sanphet Prasat 内玉座の復元），説法台のモデル，寺院壁画のレプリカ，官僚システムのチャート，三印法典他歴史文書，大砲等兵器

3. アユタヤの生活文化：都市と農村

アユタヤ時代の都市と農村の文化の諸相を描くとともに，現代のアユタヤ地域の人々の民俗文化との歴史的連続性をも示す展示を行なう。

- 1) 都市と農村の生活：農村，都域内の産業地区，外国人居留地，市場，農作業
- 2) 儀礼と祭り：仏教儀礼・祭り，スピリット儀礼，ボート・レース，テート・マハーチャート，ソンクラーン祭，ゲーム，音楽他
- 3) 文字文化（リタラシー）と文学：寺院における読み書きの習得，文学の諸ジャンル

<展示資料>：

都市と農村の生活場面のモデル，各種住居のモデル，農具，漁具，牛車，舟，調理器具，各種生活用具，楽器，民俗文化を示す寺院壁画のレプリカ，写真，貝葉文書，コーイ折本文書，仏教祭祀

各テーマごとの展示とともに，それらを統合的かつ象徴的に示すアユタヤ都市の大規模モデルをメイン・ホールに展示する。この都市モデルは個別的トピックのすべてを網羅してもしりこむものではないが，主要な三つの展示テーマのコンテクストを十分に反映するものでなければならない。モデルはアユタヤ都域内とその周辺地域をカバーするものであり，河川・水路・地形など自然地理的な要素をベースとしながら，運河・城壁・とりで・港湾施設・宮殿・寺院・各居留区・税関などの文化的景観を歴史地理的考証にもとづいて，できるだけ正確に復元することになる。

所見

以上の展示基本構想(仮)は、あくまで展示テーマ・トピックの設定と若干の利用可能な展示資料の概要を示すものにとどまっている。したがって展示に関する基本設計が作成されるためには、以下の諸点を含む詳細な展示基本構想が提出される必要があると考えられる。

1. 主要展示資料と展示のシステム

メイン・ホールに展示予定の主要展示資料(現段階ではアユタヤ都市の大規模モデル)の内容の確定。三つの展示テーマを代表する主要展示資料の確定。これらの二つのレベルの象徴的な資料(大シンボルと小シンボル)をめぐる展示の空間的なシステムの確定。テーマごとの展示方法(グラフィック展示, 比較展示, 集合展示, オーディオ・ビジュアル機材の利用等)を明確にすること。

2. 主要展示資料

主要展示資料の候補となるべきもの一つ一つにつき、その種類とその所在, 資料の規模, 資料の利用形態(実物展示, レプリカ展示, モデル展示など)の詳細を明らかにすること。

3. その他の展示資料

上記のもののほか, 補助的な展示資料及びそれに関連する諸資料につき, ひろくその種類, 所在, 規模, 利用形態を含む細目リストを作成すること。

上記の1, 2, 3の内容を含む展示基本構想の準備のためには, 綿密な資料収集調査が必要不可欠である。したがって来るべき基本設計調査が所期の目的を達成するためには, それ以前にタイ側の学者グループを中心とする, そのような資料収集調査が着手され, さらに基本設計調査と同時平行的にその作業が進行する必要があると考えられる。展示はもとより, 建物の基本設計に関わる日本側の設計コンサルタントの活動は, この資料収集調査と有機的に連動するものでなければならない。

Ⅲ 展示の準備・実施プログラムとタイ側の要請事項

展示の準備・実施プログラムについては, 大略は後述のように, 日-タイ双方によって了解されている。

1. 基本設計調査期間(昭和62年3月~4月)

基本設計調査が開始される以前に, タイ側の学者グループは主要展示資料に関する予備的資料調査を行ない, 少なくとも, それらの種類, 所在と規模等の情報を含むリストを作成する。タイ側は, それらの情報および, 基本設計調査期間における広範かつ詳細な資料収集調査にもとづいて, 展示システム, 主要展示資料, その他の展示資料を含む基本構想を確定する。そこで得られた情報を十分に利用することによって, 日本側の設計コンサルタントは基本設計を作成することになる。

2. 基本設計調査からプロジェクト開始までの期間（昭和62年5月～8月）

日本側の設計コンサルタントは基本設計をとりまとめ、それをタイ側に提示して最終的な確定を行なう。タイ側は、この間も必要な情報を収集するとともに、展示の方法・技術に関する十分な知識を習得するために研修する。

3. プロジェクト開始から完成までの期間（昭和62年9月～64年3月）

展示の設計・施工業者は、1) 実施設計を完成し、2) 展示資料の実物を収集、レプリカ、モデル、グラフィック展示資料等を制作し、3) 最終的なディスプレイを完了する。その間タイ側は、1) 展示テーマごとに展示プロジェクトチームを編成し、展示資料および、それに関連する資料収集調査を行なう。2) その情報にもとづき、写真、図版、パネル、プレート等の原稿を作成する。3) さらに収集された情報（展示資料および関連資料）を整理してカード化し、アユタヤ史に関するデータ・ファイルを完成する。

これらのおおまかなプログラムに沿って、資料館設立の所期の目的を達成するために、タイ人専門家の研修、日本人専門家の現地での指導、展示に関する資料収集調査、資料館完成後における機材の援助等に関する以下のような要請があった。

1. タイ人専門家（シニア）2名の日本の博物館における展示の方法と技術に関する研修

期間：昭和62年3月・3週間

研修機関：国立民族学博物館他

2. タイ人専門家（ジュニア）2名の日本の博物館における展示の方法と技術に関する研修

期間：基本設計調査以後、あるいはプロジェクト開始以後できるだけ早い時期・1ヶ月

研修機関：国立民族学博物館他

3. 日本人専門家2名の展示方法・技術および資料収集に関する指導のための現地派遣

期間：基本設計調査以後・6ヶ月

派遣先機関：チェラロンコーン大学文学部

4. 展示資料収集調査および収集データの整理

1) 第一次資料収集調査：昭和62年4月～8月（5ヶ月）

期間：基本設計調査時からプロジェクト開始までの期間

目的：展示基本設計・実施設計に必要な資料収集調査

予算：タイ人教官3名の日当・旅費、調査スタッフ2名の人件費、機材、消耗品他

2) 第二次資料収集調査：昭和62年9月～63年8月（12ヶ月）

期間：プロジェクト開始からディスプレイ作業開始までの期間

目的：展示資料および関連資料の収集調査（三つの展示テーマごとのプロジェクト・チームによって行なわれる）

予算：タイ人教官3名の日当・旅費、調査スタッフ6名（3プロジェクト×2人）の

人件費，事務員 2 名の人件費，機材，消耗品他

3) 収集データ整理：昭和 63 年 9 月～ 64 年 3 月（7 ヶ月）

期間：ディスプレイ作業開始からプロジェクト完成までの期間

目的：データ・ファイルの作成およびディスプレイに関する作業

予算：タイ人教官 3 名の日当・旅費，調査スタッフ 6 名の人件費，事務員 2 名の人件費，機材，消耗品，印刷費他

5. 研究活動のための機材の供与，日本人専門家の派遣

機材供与：他の大学・博物館等との研究協力体制の確立以後における研究に必要な機材の供与。資料館完成以前であっても，協力体制が確立した時点における供与を希望。

日本人専門家派遣：資料館をセンターとするユアタヤ史の国際的共同研究を実施するために日本人研究者の派遣を要請する。

所見

アユタヤ歴史資料館の設立は，その目的と機能からして，きわめてユニークな試みであり，タイ国の既存の博物館，教育研究機関と設置形態において，まったく性格を異にしている。資料館は他の博物館とちがって，すでに収蔵されている考古学的・歴史学的標本資料を基礎に設立されるものではなく，寺院，博物館，研究機関，あるいは個人所有など，各地に散在している資料を組織的に収集利用し，精密な歴史学的なデータ分析をもとにして展示を行なおうとするものである。また資料館は，他の大学（大学庁所轄）や博物館（教育省芸術局所轄）のように教官・学芸員などの専任スタッフを，現段階では有しないため，それらの設立に関わる活動は，独自の組織を通じて遂行する他に道はないと考えられる。この任務は，タイ側のプロジェクトの主体たる「アユタヤ歴史資料館設立サブ・コミッティー」，あるいは，その実行委員会である「タスク・フォース」，とりわけ，その中の学者グループを中心とする人々によって果さなければならぬであろう。したがって，それらの学者を中心に「アユタヤ歴史資料館設立準備室」を開設し，展示・資料収集調査を一環して行ない，展示に対して学術的責任をもつ体制が確立されることが強く望まれる。

そのような意味で，上記のごとくタイ側から要請のあった事項は，資料館設立の目的・機能にかなったものであると同時に，プロジェクトの成否が問われる展示作業を完成させるために不可欠のものであると考えられる。要請事項 5 は，主として資料館完成後，あるいは研究協力体制確立後のものであるが，要請事項 1～4 は，プロジェクトの開始後ただちに，あるいはそれ以前の基本設計調査段階において行なわれなければならないものであり，関係各方面は，可及すみやかにタイ側要請事項の詳細を把握するとともに，予算措置をとって実施に努力されることが望ましい。

資料館がアユタヤ史というタイ国民自らの歴史をあつかう以上、そこには自国の歴史研究の成果を十分ふまえた客観的な展示が完成されなければならないことは、いうまでもない。今回の資料館建設の無償援助プロジェクトは、施設・技術に関する援助である以上に、展示という情報伝達装置（ソフト・ウェア）の完成を援助するプロジェクトであるともいえる。したがって、このプロジェクトが、将来、タイ国の経済・社会開発にいかに関与したかが問われる場合、資料館に可視的に示される展示の内容が、重要な判断基準になるといっても言いすぎではない。そのような意味で、展示の準備・実施に関する「準備室」の基礎的な活動は、プロジェクトの成否の鍵となることは疑いない。この活動に対する援助は、従来の無償協力の施行体制の枠の中では、十分に対応できないことも予想される。しかし、技術研修計画、文化無償協力計画、さらに他の計画を組み合わせることによって、十分な協力体制を確立することが望まれる。

Ⅳ 提 言

上にも記したように、今回の歴史資料館建設の無償援助計画というのは、従来の施設・技術等を開発途上国に援助するというものと、実質的な内容においてかなり異っている。いかなる展示を行うかは、アユタヤの歴史をどう捉えるか、という問題が基本的に横たわり、それをどのような資料にもとづき、どう表現するか、という問題である。それはハード・ウェアの問題ではなく、ソフト・ウェアの問題だといえる。

今回のプロジェクトの遂行に当り、きわめて早い段階から、タイ側の研究者を中心とするタスクフォース（実行委員会）を編成し、その活動を期待するのはそのためである。この実行委員会が十全の活動を行い、資料の収集と展示準備を十分に行い得るかどうかが本プロジェクトの実質内容を規定し、ひいてはプロジェクトの成否の鍵を握ると信ずるものである。従来の慣例にとらわれることなく、この実行委員会の活動を積極的に援助し、その成果を期することが

この報告と所見は、アユタヤ歴史資料館基本構想とその実現をめぐる点に集中して述べられたものである。本資料館が完成し、実際に運営されるに当っては、なお多くの問題を抱えているものと考えられる。これらの諸問題について別に改めて所見を述べる機会を得たい。

